

41353

教科書文庫

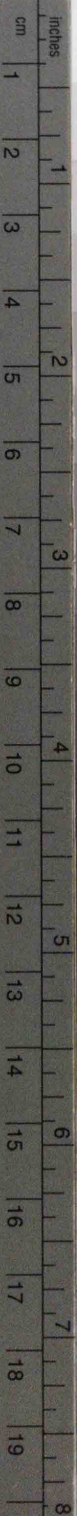
4
810
31-1921
20000
26553

Kodak Gray Scale



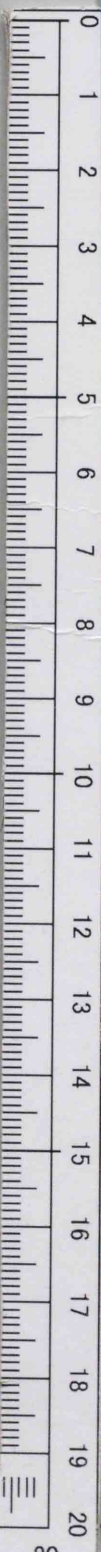
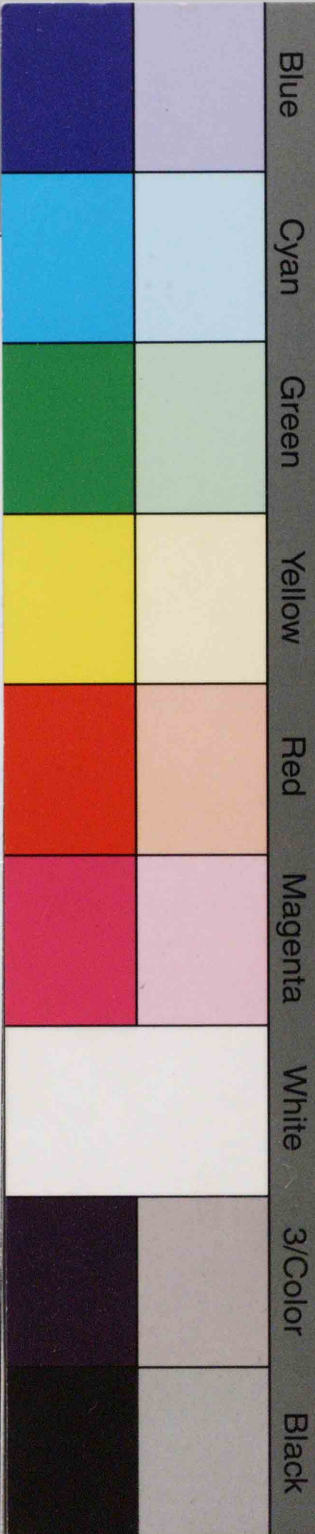
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

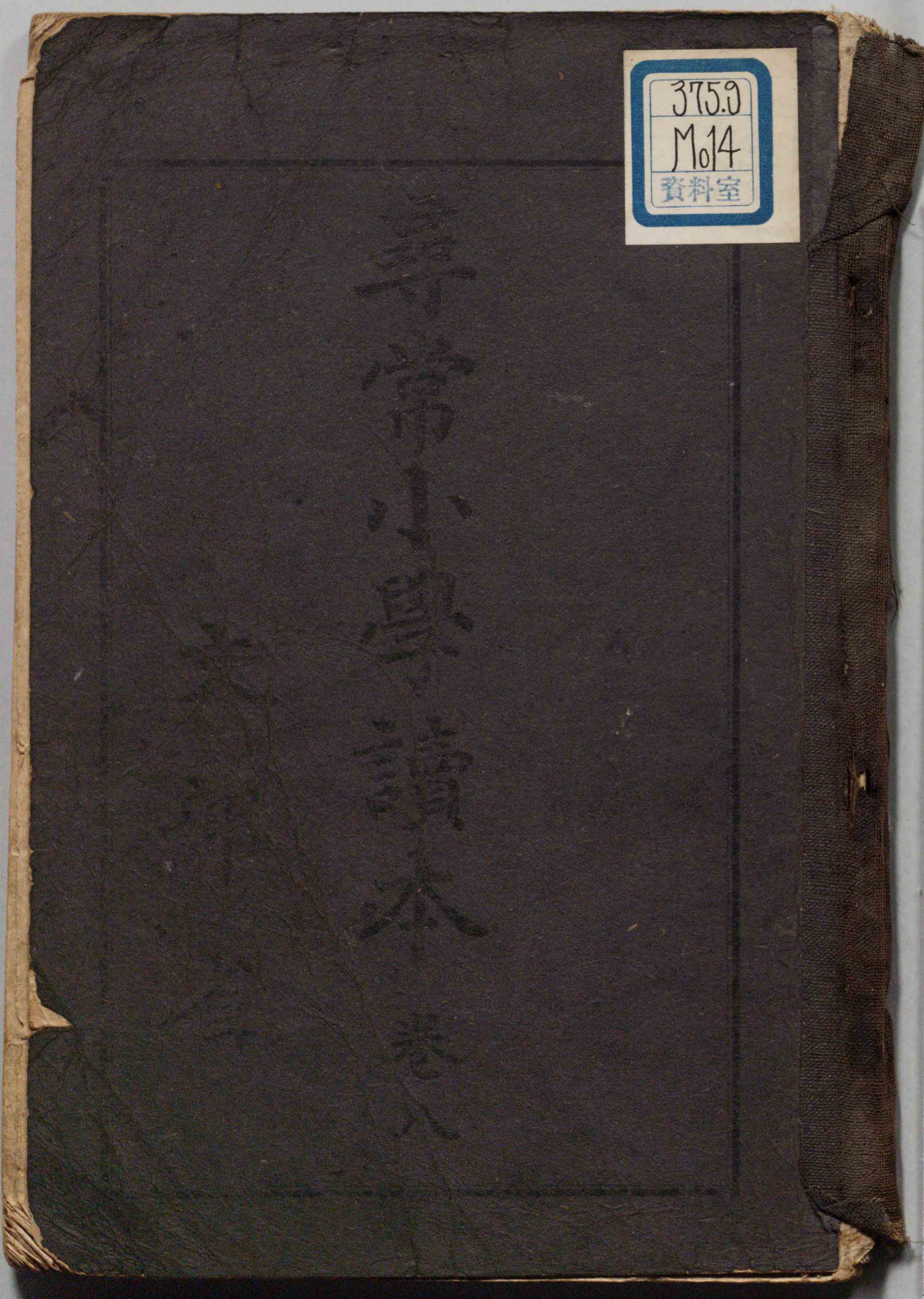


Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
M014
資料室



資料室

3959
M014



尋常小學讀本 卷八

文部省

三二二

尋常
河野

三二二

第一	天叢雲劍	一	第七十五
第二	京都	六	七十九
第三	たけがり	十	八十三
第四	海ノ動物	十二	八十五
第五	遠足の前夜	十九	八十九
第六	昨日見夕物	二十一	九十一
第七	寫真を送る手紙	二十六	九十六
第八	秋のくだもの	三十一	九十八
第九	松下禪尼	三十三	百一
第十	おぢいさんの命日	三十五	百七
第十一	火事	四十五	百十一
第十二	電報	四十三	百十四
第十三	村のかぢ屋	四十八	百十八
第十四	鳥	五十	百二十二
第十五	禮狀	五十五	百二十五
第十六	指物師	五十八	百十八
第十七	逃げたらくだ	六十二	百十八
第十八	海ノ植物	七十一	百三十三
第十九	雀の宿	七十九	七十五
第二十	ワザクラベ	八十三	七十九
第二十一	病氣見まひ	八十五	八十三
第二十二	水引トノシ	八十九	八十五
第二十三	雪合戦	九十一	八十九
第二十四	寒い國々の人	九十六	九十一
第二十五	鎌倉權五郎	九十八	九十六
第二十六	虎ト猫	百一	九十八
第二十七	虎狩	百七	百一
第二十八	革	百十一	百七
第二十九	おのぶさん	百十四	百十一
第三十	旅行先より	百十八	百十四
第三十一	橋中佐 (一)	百二十二	百十八
第三十二	橋中佐 (二)	百二十五	百二十二
第三十三	地球	百十八	百二十五
第三十四	海と陸	百三十三	百十八
第三十五	千里の山河	百三十三	百三十三

もくろく



第一 天叢雲劍

あまてらすおほみかみ
すさのをのみこと

天照大神の御弟に、素戔嗚尊と申して、大そり
勇氣のある神様がいらつしやいました。或時、
出雲國の簸川の岸をお通りになると、川上の
方から箸が流れて來ました。そこで此の川上
にも人が住んでゐるなとお思ひになつて、川
についてだんく山奥へおはいりになると、
しらがの老人が妻とともに、一人の娘を中に
置いて泣いてゐました。

第一 天叢雲劍

唯

「なぜ泣くのか。」
 と尊がお尋ねになると、老人が
 「私どもには娘が八人ございましたが、八岐やまた
をろちの大蛇と申す大じやに毎年一人づつ取っ
 て食はれまして、今は唯此の子ばかりにな
 りました。今年もちやうど其の大蛇の出で
 来る時分になりましたので、此の子の命は
 もう今日明日とも知れないのでございま
 す。」

尋八

眼頭



「八岐の大蛇といふのは、
 いったいどんな大じや
 か。」
 「長さは八つの山八つの
 谷にわたる程の大じや
 で、頭が八つ、尾が八つ、眼
 はほゞづきのやうに赤
 く、せなかにはこけが生
 えてをります。」

酒

尊は此の話をお聞きになつて、

「よし、其の大じやをたいぢしてやる。八つの
さかぶねに強い酒を入れて、大じやの來る
所へ並べて置け。」

とお命じになりました。

其の通りに用意して待つて居ると、間もなく
大じやが出て來ましたが、酒を見附けて、八つ
の頭を八つのさかぶねの中へ入れて、飲始め
ました。其の中によひがまはつて、とうく眠

血 劔

尊

つてしまひました。そこで尊は劔をぬいて、大
じやをずたくにお切りになりますと、血が
簸川に流れこんで、水がまつかになりました。
尾をお切りになつた時、劔の刃がかけたので、
ふしぎにお思ひになつて、其の尾を切りさい
て御覽になりました。すると、つばな劔が出
て來たので、「これは尊い物だ。」とおつしやつて、
天照大神にお上げになりました。

此の劔が天叢雲劔で、後に草薙劔くさなぎのつるぎと申して、三

種の神器の一つでございます。

第二 京都

久 負

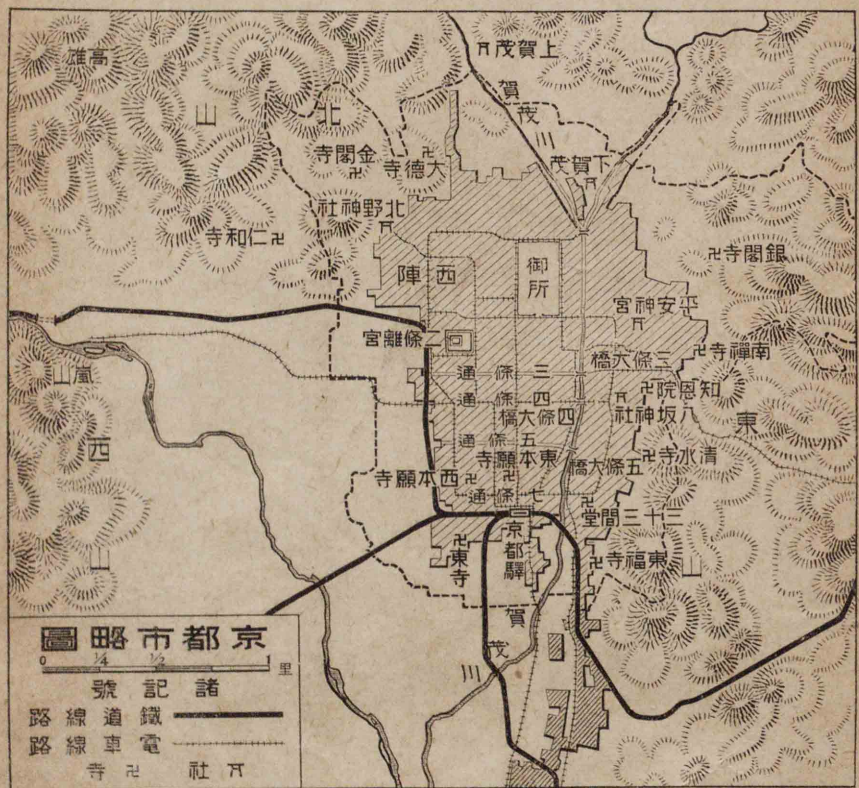
街 南
北

京都ハ一千年ノ久シキ間、歷代天皇ノ都シタ
マヒシ所ナリ。其ノ地、東ト西ト北トニ山ヲ負
ヒテ、南ノ一方ノミウチヒラケ、アタカモ三方
ニビヤウブヲタテメグラシテ、前ノシヤウジ
ヲ明ケハナシタルザシキノ如シ。

市街ハ町スヂ正シク、東西南北ニ通ジテ、ゴバ
ンノ目ノ如ク、名高キ三條^{デウ}、四條、五條等ノ通ハ、

尋八

部



イツレモ之ヲ
東西ニ貫ケル
大通ナリ。東海
道線ノ京都驛
ハ七條通ノ南
ニアリ。賀茂川^{カモ}
市ノ東部ヲ貫
キ流ル。之ニカ
カレル橋ノ重

古跡

即 産

ナルモノハ、三條四條ノ大橋ニシテ、五條ノ大橋ハ牛若辨慶ビシケイノ話ニ名高シ。京都ニハ、御所ヲ始メ、名所古跡スコブル多シ。御所ハ市ノ北部ニアリ。正面ノ御門ノ前ニ立チテアフギ見レバ、ヒハダブキノ御屋根カウガウシク、大正四年ノ秋、コ、ニ行ハレシ御即位ノ大禮ノ御有様モ思ヒヤラル。二條離宮リキヨハ御所ノ西南ニアリ、其ノ西北ニ當ル西陣ハ京織物ノ産地トシテ聞ユ。東寺ト東西本願寺ホンガント

尋八

殊

以

宮

ハ京都驛ニ近キ所ニアリ。東寺ノ高キ塔タ、兩本願寺ノ大イナル屋根ハ、殊ニ人ノ目ヲヒク。三方ヲカコミタル山々ノ中、東ニアルヲ東山、西ニアルヲ西山、北ニアルヲ北山トイフ。東山ハ殊ニ姿ノヤサシクウルハシキヲ以テ名アリ。賀茂川ノ西岸ヨリ東山ヲナガムレバ、寺社ノ屋根、塔ノサキナドノ木ノ間ガクレニ見ユル様、マコトニ美シ。東福寺、三十三間堂、清水寺、八坂神社、知恩院チオンキンナンゼン、南禪寺、平安神宮、銀閣寺ギンカク、寺ナド

著

殊ニ名高シ。

北ヨリ南ニカケテモ、下賀茂・上賀茂ダイトク・大徳寺・北野神社・金閣寺・仁和寺ニナナド、著名ナル社寺多シ。モミヂニ知ラレタル高雄クカヲ、櫻ニ名高キ嵐山アミシハ、市ノ西方數里ノ所ニアリ。京都ノ名所・古跡ヲ一々尋ネメグラシニハ、一箇月ヲツヒヤストモナホ足ラザルベシ。

第三 たけがり

秋の日の空すみ渡り、

路

風暖に、さてもよき日や。

山遊びするによき日や。

友よ、來よ。手かごを持ちて、

いぎ、裏山にきのこたづねん。

山深く行きてたづねん。

たどり行く細路づたひ、

はや、かうばしくきのこにほへり。

山風にきのこかをれり。

うれし、此の松の根本に、

先

寄

棲

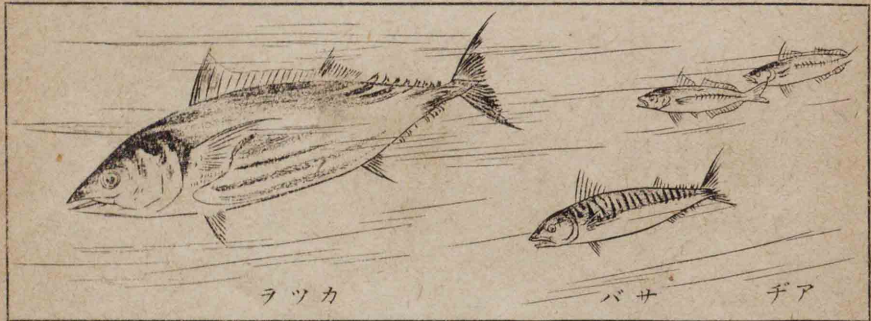
先づ見附けつ。と高く呼ぶ聲。
やまびこにひびく呼聲。

いでや、あの岩の小かげに、
皆打寄りてえもの數へん。
たけがりのいさをくらべん。

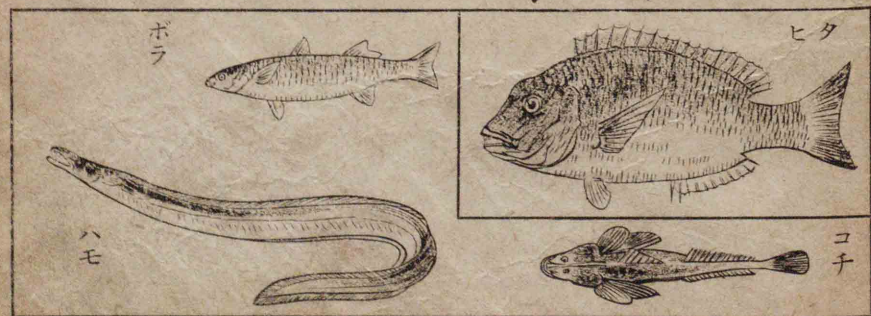
第四 海ノ動物

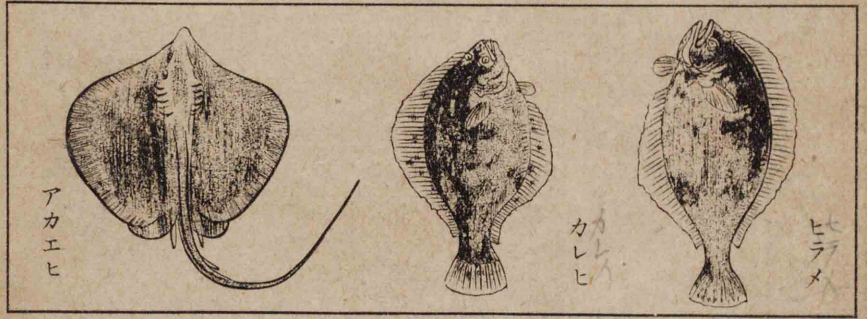
陸ニ居ル動物ノ種類ハ數限リモ無イガ、海ニ
モ様々ナ動物ガ棲ンデキル。
海ノ動物デ我々が最モヨク知ツテキルノハ、

泳 陰 底



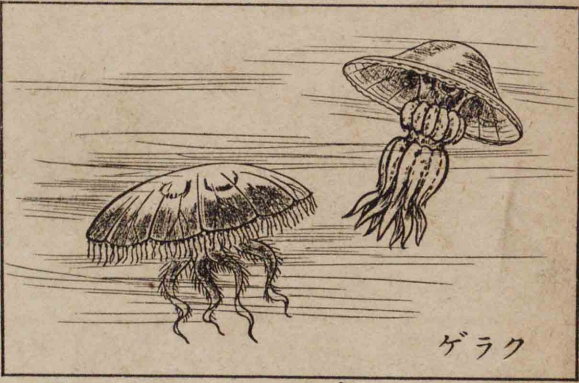
魚デアアル。魚ノ中デ、イ
ワシ・カツヲ・サバ・アヂ
ナドハ水面ニ近イ所
ヲ泳ギ廻リ、タヒボラ
ハモ・コチ・キスナドハ
岩ノ陰ヤ海草ノ間ニ
居ルコトガ多イ。又カ
レヒ・ヒラメ・アカエヒ
ナドハ水底ニ棲ンデ





アカエビ
カレヒ
ヒラメ

ギテ、時々砂ノ中へモ
グリコム。
魚ノ外ニ、エビ・カニ・タ
コ・イカナドガ居ル。エ
ビガピン／＼ハネタ
リ、カニガ横ニハツタ
リ、タコヤイカガ足ヲ
揃へテ泳イダリスル
ノハ、マコトニオモシ



ゲラク

ロイ。クラゲハ波ニユ
ラレテフワリ／＼ト
動イテキルガ、アレデ
モ自分デ泳グカモア
ルノデアアル。
貝ノ類モタクサン居



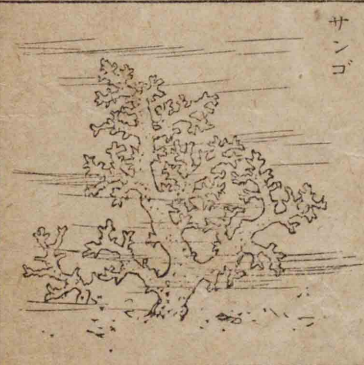
ル。アサリハマグリナドハ砂ヤドロノ中ニ居
リ、アハビ・カキナドハ岩ニクツ附イテキル。カ
キハスグフエルモノデ、又一度物ニ附イタラ

離
速カ



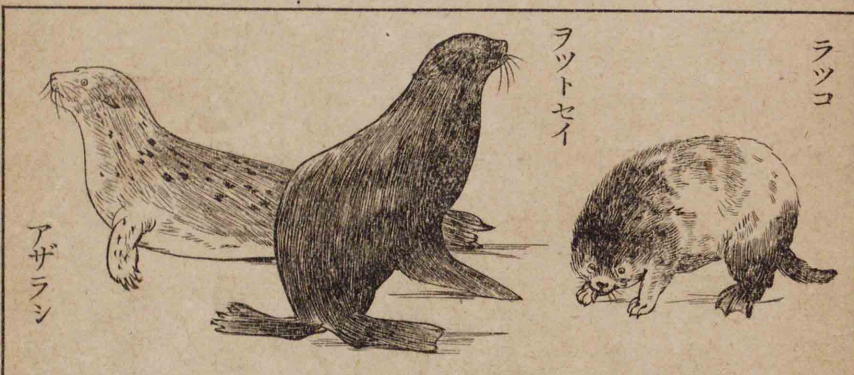
シンジユ貝

決シテ離レナイ。船底ニタクサン附
 クト速カガヘルカラ、軍艦ヤ汽船デ
 モ時々ソレヲカキ落サナケレバナ
 ラナイ。又シンジユ貝トイフ貝ガアル。指ワヤ
 エリドメナドニハメル美シイシンジユハ、此
 ノ貝ノ中ニ出來ルノデアアル。
 海ニ居ル虫ニハメヅラシイ物
 ガ中々多イ。サンゴ虫ハタクサ
 ン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲ



サンゴ

骨



ラッコ

ラットセイ

アザラシ

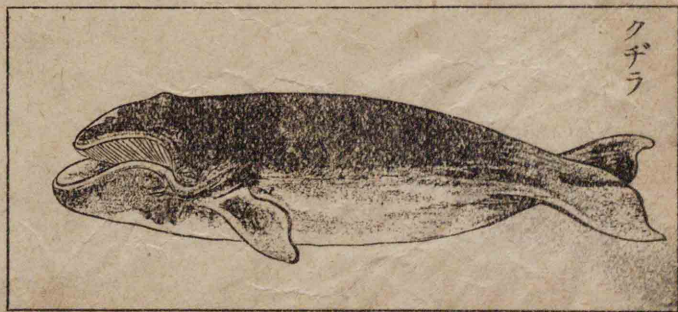
シテキル。カンザシノ玉ヤヲジ
 メナドニスルサンゴハ、此ノ虫
 ノ骨デアアル。海綿モヤハリ海ノ
 底ノ岩ナドニ取附イテキル虫
 ノ骨デアアル。
 海中ニ棲ム獸ニモイロク、ア
 ル。陸上ノ獸ニ似タモノデハ、ラ
 ツコ、ラツトセイ、アザラシナド
 ガ最モヨク人ニ知ラレテキル。

實

比

大人

魚ニ似タモノデハクヂラガアル。クヂラハ尾モアリ、ヒレモアリ、全體ノ形ガ魚ニ近イカラ、誰モ魚ダト思フデアラウガ、實ハ獸ナノデアル。動物ノ中デ一番大キナモノハ此ノクヂラデ、中ニハ長サガ十三四間程ノガアル。陸ニ棲ム動物デハ先ヅ象ガ一番大キイガ、クヂラニ比ベルト大人ト赤子ヨリモモツト違フ。



クヂラ

遠飯

第五 遠足の前夜

夕御飯をすまして、ねえさんと一しよにお湯にはいりました。お湯から上つて、おかあさんに明日着て行く着物やはかまを出していただきました。ざうりやたびや手ぬぐひも揃へました。おべんたうは明日の朝おかあさんがこしらへて下さるはずです。これですつかりしたくが出来ました。もう忘物はないかと、幾度もしらべて見ましたが、何

もありません。

お天気はどうかと思つて外へ出て見たら、空には美しい星がきら／＼光つてゐました。思はずおゝ、うれしい。と言ひました。

着物やはかまをまくらもとに置いてねました。明日は早いから早く眠らうと思つても、なかなか眠られません。明日の楽しい事が後から後から目に浮かんで來ます。

勝手の方で、[「]あんなにうれしがつてゐたが、[」]も

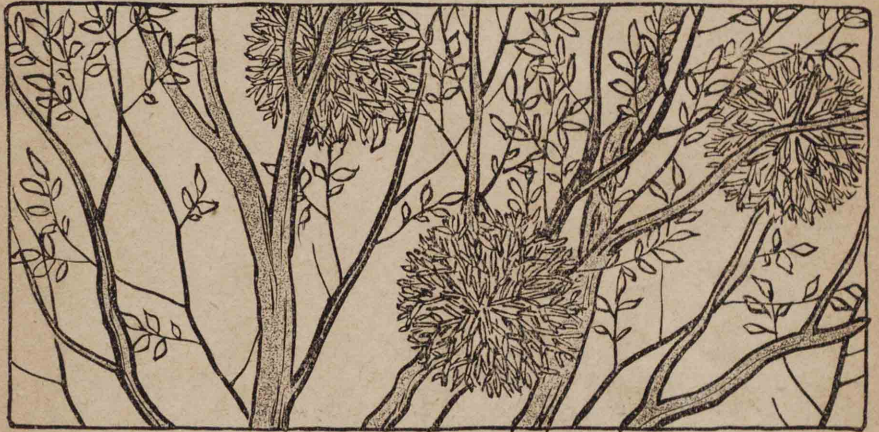
う眠つたのか知らん。[「]もう明日のゆめでも見てゐるでせう。[」]とおつしやる、おかあさんやねえさんのお聲が聞えました。八時を打つとけいの音はゆめうつゝに聞きました。

昨日

第六 昨日見夕物

友太郎ト浅吉ハイトコドウシデ、學校デモ同級生デアル。日曜日ニ二人ガ連立ツテ、山ノ方へ遊ビニ行ツタ。翌日浅吉ガ友太郎ノウチへ行ツテ、昨日ノ話ヲシテキルト、友太郎ノ兄ガ

翌



二人ニ尋ネタ。

何カ珍シイ物デモ見テ來

タカ。

浅ノ

榎ノ木ノ枝ニ圓ク茂ツタ

別ノ木ガクツ附イテキテ、

ソレニ赤イ實ガナツテキ

マシタ。アレハ何デセウ。

ソレハヤドリ木トイフ木

ダ。外ノ木ニクツ附イテキ

ルノハ、人ガヨソノウチニ泊ツテキルヤウ
ナモノダカラ、サウイフノダラウ。

友太郎

ソレカラ、川ノフチへ出タ時、美シイ鳥ヲ

見マシタ。スゞメヨリハ少シ大キクテ、羽ハ

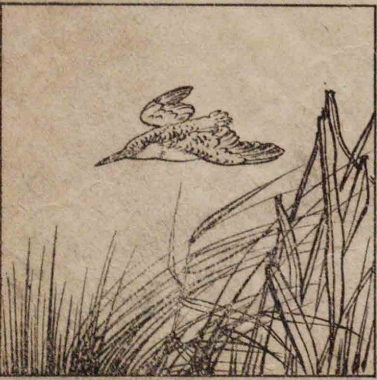
ミドリ色デ、尾ハ有ルカ無イカワカラナイ

クラキデスガ、クチバシハ割

合ニ長イノデス。僕等ノ足音

ガ聞エルト、水ノ上ヲ低ク飛

ンデ、逃ゲテ行キマシタ。



沼

兄「ソレハカハセミトイフ鳥ダラウ。カハセミハ川ヤ池ヤ沼ノヤウナ水ノアル所ニ居テ、魚ヲ取ツテ食ツテヱル。魚ヲ取ル鳥ハ大テイクチバシガ長イ。」

浅言

大ヘンニ腹ノフクレタカマキリガ幾匹モ居マシタ。アレハ病氣ナノデセウカ。」

兄

「ソレハタクサン卵ヲ持ツテヱルノダラウ。サウデナケレバ、針金」



尋八

寄 生

虫トイフ長イ虫ガ腹ノ中ニ居ルノダ。其ノヤウニ、他ノ動物ノ體ノ中ニ棲ンデヱル虫ヲ寄生虫トイフ。人ノ腹ノ中ニモ寄生虫ガ居ルコトガアル。ソレハ生水ヤ生ノ食物ト一シヨニ口カラハイルコトが多い。」

兄ハ、二人ガヨク氣ヲ附ケテ、サマハナ物ヲ見テ來タコトヲホメテ、

「人ハ何事ニモ注意ガカンジンダ。注意シテヱレバ、道ヲ歩ク間ニモ、イロ／＼爲ニナル」

注 爲

事がオボエラレル。
ト言ツタ。

第七 寫眞を送る手紙

寫眞

此の間にいさんが歸つて來ましたので、うち中の者が揃つて、寫眞をとりました。ついでに私一人のもとりましたから、兩方一枚づつ差上げます。三郎はいつもにこくしてゐますから、寫眞でも笑つてゐます。私の

は、一人の分はうつかりしてゐる間にうつされたので、まあよくうつりましたが、みんなと一しよの分はまじめになり過ぎて、にいさんによそ行の顔だと言つて笑はれました。をば様、お笑ひになつてはいけませんよ。

十一月五日

はな

をば上様

返事

お寫眞を有難う。よくうつつてゐるので、皆さんにお目にかゝるやうな氣がします。三郎さんはまことにかはいらしくうつりました。おはなさん、一人の分はほんたうによくうつつてゐます。皆さんと一しよの分は、おはなさんも次郎さんも、なるほど少しまじめになり過ぎましたね。

宜

おはなさんはしばらく見ないうちに、大そう大きくなりました。段々おかあさんに似て來ます。此の寫眞で見ると、おかあさんの小さい時分にそつくりです。こちらでも其の中みんなでうつして送ります。皆さんに宜しく。

十一月八日

をばより

おはな様

第八 秋のくだもの

熟

真赤

照

此の頃、いろ／＼なくだものが熟してゐるが、最も多く目に附くのはかきである。今年はかきの當り年だと見えて、どこの木にも鈴なりになつてゐる。散残つた真赤な葉と黄色な實が日に照らされて、すみ渡つた秋の空に浮いて見えるのは、いかにも美しい。どこの山へ行つて見ても、栗の木の枝にはいすがゑみ割れてゐて、つやく／＼した實がそこ

張裂

にもこゝにも落ちてゐる。中にはいがのまゝ落ちてゐるものもある。それを足でふんで、ぼろきれでむくのもおもしろい。又御宮の森には大きなしひの木があるが、風の吹いた朝などは、其の下にしひの實が一面に散らばつてゐる。うちの庭のざくろももうよく熟した。大きな實が張裂けて、たくさんの赤い種が見えてゐるのは、大きな口をあいて笑つてゐるやうで

佛

ある。
みかんやきんかんもそろそろ黄ばみかけた。
うちの畠のみかんも、早い分はもう食べられ
るやうになつた。二三日前に初物をもいで、佛
様へ供へた。もう少したつとすつかり熟して、
黄金の玉のやうになる。
ゆずやだいぐの實もたくさんなつてゐる
が、どこのを見てもまだ青いのが多い。

第九 松下禪尼

招待

障

給

及

得爲

北條時頼ホウデウトキヨリノ母松下禪尼、或日時頼ヲ招待セン
トテ、ス、ケタル障子ノ破レヲ手ヅカラツク
口ヒキタリ。禪尼ノ兄義景ヨシカゲコレヲ見テ、
カ、ル事ハ召使ニ命ジ給ヘ。自ラ手ヲ下シ
給フニ及バザルベシ。
ト言ヒシニ、
「自ラ爲シ得ルコトニハ、人手ヲカルマデモ
ナシト思フナリ。」
トテ、ナホ前ノ如ク、オボツカナキ手ツキニテ、

悉

總

破レタル所ヲ一小間ヅツ張リキタリ。義景重
ネテ、

「サラバ悉ク張リカヘ給
ヘ。切張ハマダラニナリ
テ見苦シ。」

ト言ヘバ、

「我モ後ニハ悉ク張リカ
ヘント思ヘリ。サレド總
ベテ物ハ破レタル所ヲ



ツクロヒテ用フレバシバラクハ用ヲ爲ス
モノゾト、若キ者ニ知ラセントテカクスル
ナリ。」

ト答ヘタリトゾ。

時頼ガ自ラ節儉ヲ守リテ、國民ノ手本トナリ、
ヨク天下ヲ治メタルハ、カ、ル母ニソダテラ
レタルニヨルナルベシ。

第十 おぢいさんの命日

今日はおぢいさんの御命日である。佛だんに

佛

節儉
治

は、おぢいさんのおすきであつたいろくくな物が供へてある。兩わきの花立の花がらふそくの弱々しい光に照らされて、さびしく見える。

清

家内一同着物を着かへ、手を清め、代るく線香を上げて、おるはいを拜んだ。おばあさんやおかあさんが、目に涙を浮かべながら、じゆずをつまぐつていらつしやるのを見ると、何となく悲しくなつた。



おぢいさんは大へんに私をかはいがつて下さつた。今でもおぢいさんの事を思ふと、あのにこにこしたお顔がすぐ目の前に浮かんでくる。私がまだ小さかつた時分、毎晩おひぎの上にだかれて、いろくなおもし

ろい話を聞いた楽しさは、今に忘れられない。今使つてゐるあのすゞりもすゞり箱も、おぢいさんにいたゞいたのである。本立も始めて全甲を取つた御ほうびに、買つていたゞいたのである。

みんなでお茶を飲みながら、いろく〜とおぢいさんの話をした。

治

おとうさんのお話によると、明治の初に世の中の有様が急にかはつて、十何代さかえてき

た僕のうちも、一時つぶれさうになつたが、おぢいさんのおはたらきで、元のやうに盛になつたのだといふことである。此の家もくらも皆おぢいさんがお建てになつたのだと思ふと、高い屋根にも、太い柱にも、おぢいさんのたましひがこもつてゐるやうな氣がする。おぢいさんは又村の爲にもよく力をつくされた人で、学校の前の橋もおぢいさんがおかけになつたのださうだ。

話はそれからそれへと續いて、なか／＼つき
ない。

第十一 火事

チヤン、チヤン、チヤン。カネが鳴ル。火事ダ、火事
ダ。ドコダラウ、餘り遠クハナイラシイ。
アチラノ空が眞赤ダ。火ノ粉が花火ノヤウニ
散ツテキル。弓張ヂヤウチンヲ持ツタ人が、後
カラ後カラ續イテトンデ行ク。
火元ハ郵便局ノ裏通ノ材木屋デ、モウ本町通

粉

角

隣

倒

烈

ヘヌケテ、今角ノゴフク屋ガ焼ケテキルノダ
サウダ。ア、火ノ勢ガ一ソウ強クナツタ。又隣
ヘウツツタノカモ知レナイ。方々ノ屋根ノ上
ニ人が立ツテ、見張ヲシテキル。火事場デワイ
ワイサワグ聲ヤ、建物ノ倒レルスサマジイ音
ガ、一ツニナツテ聞エル。
長イ天氣續キデ乾キキツテキル上ニ、今夜ノ
此ノ烈シイ風デハ、ドコマデ焼ケテ行クカワ
カラナイ。ウチハ仕合ニ風上デ安心ダガ、ヲチ

棟藏 幸

サンノウチハドウダラウ。オ見マヒニ行ツタ
 ニイサンガ早ク歸ツテ來レバヨイ。
 段々下火ニナツテキタト思フト、又火ノ粉ガ
 パツト立ツ。サツキカラモウ二時間モタツガ、
 ドノクラキ焼ケタダラウ。
 ニイサンガ歸ツテノ話ニ、ラヂサンノウチハ
 幸ニ無事デアツタサウダ。火事ハケイサツシ
 ヨ前ノ米屋ノ土藏デ止ツタガ、二棟ノ土藏ノ
 中一棟ハトウく、焼落チタトイフコトダ。郵

煙草

報

便局ヤケイサツシヨモ一時ハアブナクナツ
 テ、大事ナ書類ヲ取出シタ程デアツタサウダ。
 聞ケバ、火事ハ材木屋ノ小屋カラ出タノデ、多
 分煙草ノ吸ヒガラガ元ダラウトイフ話ダ。一
 服ノ吸ヒガラカラコンナ大火事ニモナル。火
 ノ取扱ハ大切ニシナケレバナラナイ。

第十二 電報

ヤケヌカシンセキイカガキムラ

父「東京のをぢさんから火事見まひの電報が

近

来た。」

「一郎」 どうしてそんなに早くわかつたのでせう。」

「父」 こちらでは近年にない大火事だから、東京の今朝の新聞に出たので、おわかりになつたのだらう。をぢさんが御安心なさるやうに、御返事の電報を上げよう。お前一つ書いてごらん。」

サクヤノクワジニウチハヤケマセ
ンデシタシンセキモミナブジデス

簡 單

ゴアンシンクダサイ

「一郎」 これでようございますか。」

「父」 それでは長過ぎる。電報の文はなるべく簡單に書かなければならない。焼けない事さへいへば、御安心なさるから、ゴアンシンクダサイと書くには及ばない。又電報だから、ことばもそんなにていねいに書くことはいらない。」

サクヤウチヤケナイシンセキミナ

省 濁音

ブジ

「一郎」これではどうでせう。

「父」それでもよいが、火事の昨夜あつたことはもう御存じだから、サクヤは省くがよい。又ヤケナイといふのもブジといふのも同じ事だから、どちらか一つあればよい。電報は十五字までが一音信で、濁りのある字は二字に數へる。うちの名の林を入れて、一音信になるやうに書いてごらん。」

頼

電報頼信紙

取扱上不都合の廉あらば口頭又は無料郵便にて申越されたし
電一號 九六 東京山本製

書方注意
文字はハッキリと
見難に書くと
見誤ります
數字は大きく
小さいと假名
と間違ひます
宛所は判りよく
判りにくい配達
がてまざります

電報料 特殊取
定指 名氏所居人信受

電報料	トウキヤウシ カウヂマクク タクヒラチャウ バンチ キムラハルキケ	電報料	トウキヤウシ カウヂマクク タクヒラチャウ バンチ キムラハルキケ
電報料	ハヤシ	電報料	ハヤシ

●ところけあ字一は下の字文音濁半音濁●

●マニコ、ユビエ、レヒシ、又ゴス、フビク、ワビツ、ニミ、ハミハ等は書方にて間違ひ易し

「一郎」ウチシンセキミナブジハヤシ
かうすると、ちやうど一音信になります。

これにお書きなさい。」

「父」それでよろしい。こゝに頼信紙があるから、

第十三 村のかぢ屋

息

(一)

しばしも止まずに つち打つひびき。

飛散る火の花 走る湯玉。

ふいごの風さへ 息をもつがず、

仕事にせい出す 村のかぢ屋。

(二)

主は名高き いつこくおやぢ、

早起早ねの 病知らず。

堅 勝

鐵より堅しと ほこれるうでに

勝りて堅きは かれが心。

(三)

刀は打たねど、 大鎌・小鎌

馬まぐは鋏きぐはに作鋏すき 鋤すきよなた、

平和の打物 休まず打ちて、

日毎に戦ふ 懶情えだの敵と。

(四)

かせぐに追附く びんぼふなくて、

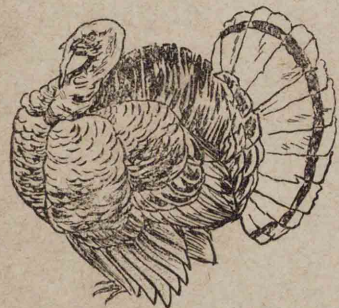
和

候 食捕

名物かぢ屋は 日々にはんじやう。
あたりには類なき 仕事のほまれ、
つち打つひぶきに まして高し。

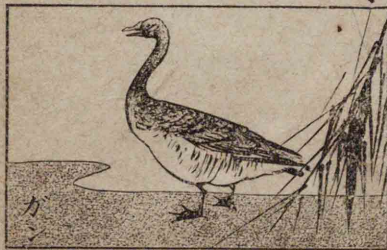
第十四鳥

ワシ・タカ・トビナドノ如ク、大空ヲ飛廻リテ他



鳥面七

ノ鳥ヲ捕ヘ食フ鳥、
及ビツルガンツバ
メナドノ如ク、氣候
ニヨリテ遠ク棲ム



カシ



ギサ

所ヲカフル鳥
ハツバサ大ナ

リ。又ニハトリ七面鳥アヒ
ルナドノ如ク、地上又ハ水
上ニ居テ、飛ブコト少キ鳥
ハツバサ小ナリ。



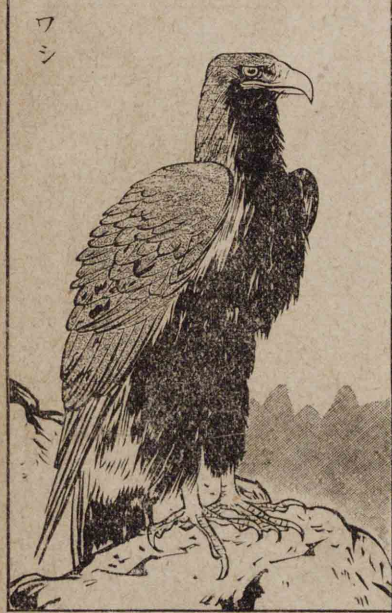
ナヒク

ツルサギクヒナナ
ド水中ヲ歩ム
鳥ハ、總ベテハ



グテウ

甚

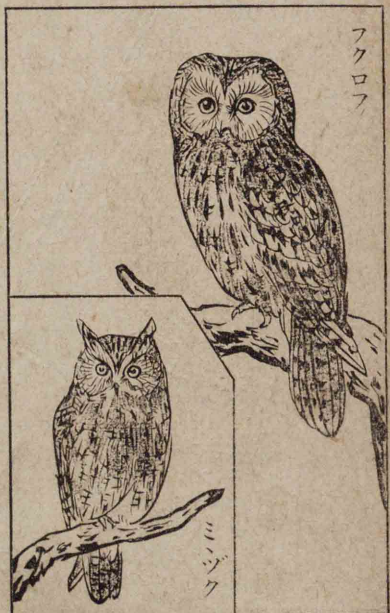


ギ長シ。陸上ニ居ル鳥ニテハ
 ギノ長キモノハダテウナリ。
 ダテウハ鳥類中體最モ大ニ
 シテ、ハギ甚ダ長ク、走ルコト馬ヨリ
 モ早シ。ハギノ長キ鳥ハ大テイ首モ
 長ク、首ノ長キ鳥ハク
 チバシモ長シ。サレド
 カハセミハハギモ首
 モ短クシテ、クチバシ



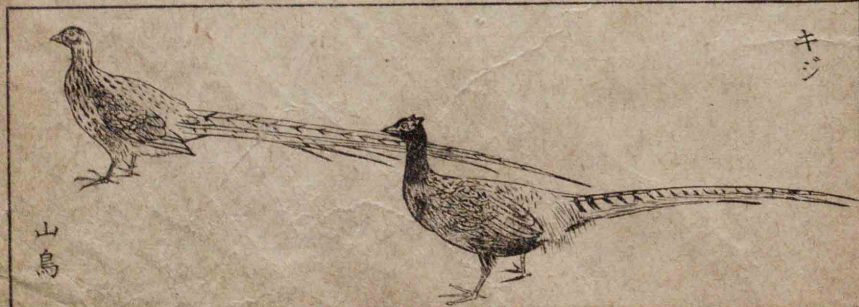
平

鋭



テ、クチバシノミ短シ。
 水鳥ノクチバシハ平タクシテサ
 キ圓ク、陸鳥ノクチバシハ圓ク細
 クシテサキトガレリ。ワシ、タカ、ト
 ビナドハ上ククチバシコトニ鋭ク

ノミ長ク、
 ダテウハ
 ハギモ首
 モ長クシ



シテ、ヤ、太シ。
 イスカノク
 チバシハ上
 下クヒ違ヘ
 ルガ故ニ、イス
 カノハシノクヒ
 違ヒ。トイフコトアリ。
 目ノ最モ恐シゲナルハ、ワシタカノ類ニテ、大
 ナルハフクロフミ、ヅクノ類ナリ。尾ノ短キ



クジヤク

誠 状

鉛筆

ハカハセミアヒルナドニテ、長キハキジ山鳥
 クジヤク等ナリ。クジヤクガ其ノ長キ尾ヲ扇
 形ニ廣ゲタル様ハ、誠ニ見事ナルモノナリ。

第十五 禮状

(一)

今日學校から歸つて見ると、ふだん
 ほしいくと思つてゐた箱入の色
 鉛筆が、机の上につてゐました。と
 うしたのかと思つて、おかあさんに

伺

圖画

昨夜

伺つたら、をぢさんからお前に送つて下さつたのです。とおつしやつたので、飛上るやうにうれしうございました。をぢさん、誠に有難うございます。今度此の鉛筆でうまく圖画をかいて、お目にかけます。

(二)

昨夜にいさんがお歸りになつた時、私はもう眠つてゐました。ゆり起さ

邊

れたので起きて見ますと、にいさんが「これはをばさんからです」と言つて、紙箱を渡して下さいました。あけて見たら、美しい花かんざしがはいつてゐました。うれしくてくすつかり目がさめてしまひました。おかあさんやねえさんも「こんな美しいのは此の邊にはない」とおつしやいました。をばさん、どうも有難うござ

います。大事にしまつて置いて、お正月にさします。

第十六 サシモノシ 指物師

或指物屋ノ細工場デ、二人ノ指物師ガ毎日一シヨニ仕事ヲシテキタ。二人トモ同ジクラキナウデ前デ、同ジ様ナ勉強家デアツタ。シカシ一人ノ指物師ハイクラ骨折ツテモ、他ノ一人ニ比ベルト、仕事ガハカドラナカツタ。ソコデフシギニ思ツテ、相手ノ仕事ブリヲジツト見

テキルト、休ナシニ手ヲ動カシテハキルガ、別ニ急グ様子モナイ。二三日續ケテ注意シテ見テモ、イツモ其ノ通りデアル。イヨ／＼フシギデタマラナイノデ、

君「ハイツモユツクリト仕事ヲシテキル様ダガ、ソレデキテ、アセツテ仕事ヲスル僕ヨリモハカガ行クノハ、ドウイフワケカ。何カヒデンガアルナラ、教ヘテクレナイカ。」

ト聞イテミタ。相手ノシヨク人ハ笑ヒナガラ、

分

「僕ニハヒデンナドトイフコトハ別ニナイ。君ノ方が大分ムダニ時間ヲツブスカラ、オソイノダラウヨ。」

ト言ツタ。聞イタシヨク人ハ大イニ驚イテ、
「實ハ君ニ負ケマイト思ツテ、僕ハ一生ケンメイニヤツテキルノダ。ムダニツブス時間ナドガアルモノカ。」

「イヤ、サウデナイ。君ノ仕事ヲスルノヲ見テキルト、カンナデモノミデモ使ヒバナシニ

シテ、ドコヘデモハフツテ置イテ、マタイル時ニナルト、ヨク木切レヤカンナクツノ中ヲ、大サワギシテサガシテキル。ソレガ一日ノ中ニ二ヘンヤ三ベンノ事デハ無イカラ、半月、一月ノ間ニハ、君ガ道具サガシニツブス時間ハ中々多イモノニナル。僕ハカンナハドコ、ノミハドコト、一々置場所ヲキメテ置クカラ、目ヲツブツテキテモ、入用ノ道具ガスグ手ニ取レル。道具ヲサガス爲ニ時間

ヲツブスヤウナコトハ全クナイソレデキ
ツト僕ノ方が早イノダラウ。

第十七 逃げたらくだ

(一) さばくの中

さばくの中で、或旅人が二人の商人に出會つ
た。

旅人「あなた方は大そう心配らしい様子をして
おいでだが、若しやらくだを逃したのでは
ありませんか。」

旅

二人「さうですく。」

旅人「其のらくだは片目ではありませんか。右の
目がつぶれておませう。」

二人「よく御存じですね。全く其の通りです。」

旅人「さうして左の足が一本短くて、前歯が二三
本ぬけておませう。」

二人「それに違ひありません。どこで御覽になり
ましたか。」

旅人「さうして、附けてゐた荷は夢でせう。」

片

二人「たしかにさうです。どこに居るか、どうぞ早く教へて下さい。」

委

旅人「いや、私は其のらくだを

見たのではありません。」

甲「え、でもそんなに委しく

御存じではありません

か。」

乙「それとも誰かにお聞き

になつたのですか。」



第八

旅人「いゝえ、見たのでも、聞いたのでもありません。」

二人は顔を見合はせて、

甲「をかしいね。こいつがどろばうだぞ。」

乙「さうだく。さあ、警察署へ引張つて行け。」

二人はむりに旅人を警察署へ引張つて行つた。

警察署

裁判官

(二) 裁判所

旅人は警察署から裁判所へ廻された。裁判官

は三人を呼出して、

裁判官「たいどういふ事が、委しく申せ。」

甲「此の男が私どものらくだを盗んだのでございませぬ。私どもは麥を附けたらくだを引いて、さばくの中を通つてゐましたが、途中で一休してゐる中、つい眠つてしまひました。」

途

乙「目がさめて見ると、らくだが居ませんので、驚いて方々さがして歩きました。其の途中



で此の男に出會ひますと、向ふから「らくだを逃したのではないか」と尋ねるのでございます。甲「さうして、其のらくだは片目だらうの、びつこだらうの、齒がぬけてゐるだらうのと、一々見たやうに申すのでございます。」

乙「其の上、附けてゐた荷物の品まで言當てま
した。」

二人「らくだを盗んだのは、どうしても此の男に
違ひありません。」

裁判官「こりや、旅人、其の方にも言分があるなら
ば申せ。」

旅人「私を盗人などとは、もつての外でございま
す。私がさばくを歩いてゐますと、らくだの
足跡が續いてゐるのに、人の足跡が見えま

側

せん。それでらくだが逃げたのではないか
と思つたのです。」

裁判官「其のらくだが片目だといふことは、どう
して分つたか。」

旅人「道の片側の草ばかりが食つてあつたから
でございます。」

裁判官「それでは、びつこといふことはどうして
知つてゐる。」

旅人「片方の足跡が一つ置きに浅くなつて居る

ので察しました。

裁判官「歯のぬけてゐるといふことはなぜ分つ

たか。

旅人「草を食取つた跡を見ますと、かみ切れない
で残つてゐる葉があるので、さう考へまし

た。

裁判官「なるほど、聞いて見れば一々もつともで

ある。

二「もしく、それなら荷物の品をどうして知

つてゐるのでございませうか。

旅人「それは何でもありません。道に麥がこぼれ
てゐたからです。

裁判官「よし／＼、よく分つた。確にお前が盗んだ
のではない。もう歸つて宜しい。二人がうた
がつたのもむりではないが、今聞いた通り
である。早く行つてらくだをさがすがよい。」

第十八 海ノ植物

海中ノ植物ハ皆二三百尺ヲ越エザル深サノ

髮

所ニ生ズ。其ノ形様様ニシテ、帯ノ如ク廣ク長キモノアリ、全體細カニ分レテ、枝ノ如クナレルモノアリ、髮ノ毛ノ如ク細長キモアリ、ニハトリノ尾ニ似タルモアリ。色モマター様ナラズ。テングサハ

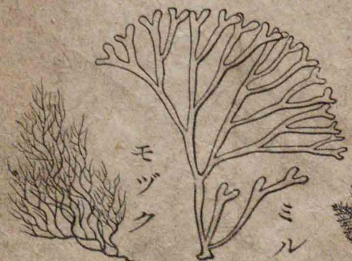


紅綠

野稀

紅色、ミルモヅク等ハ綠色、コンブアラメ等ハ茶色ナリ。紅色ノモノハ深キ所ニ多ク、綠色ノモノハ淺キ所ニ多ク、茶色ノモノハ大テイ其ノ中間ニ生ズ。

陸上ノ植物ニハ花アルモノ多ク、四季折々ニ山野ヲカザレドモ、海中ノ植物ニハ花ノ咲クモノ稀ナリ。サレド波ニユラル、海草ノ間



食

藥肥

製

ヲ、色形様々ナル魚類ノ、或ハ浮カビ或ハ沈ミ
 テ泳ギメグル様ハ、誠ニ美シキナガメナリ。
 海中ノ植物ニモ食用トナルモノアリ。コンブ
 ワカメアラメヒジキノリモツク等コレナリ。
 此ノ外、テングサヨリハトコロテン・カンテン
 ヲ製シテ食用トス。又フノリツノマタ等ヨリ
 ノリヲ製スルハ、人ノヨク知ル所ナリ。近年ハ
 海中ノ植物ヨリ、盛ニ肥料藥品ヲ製スルニ至
 レリ。

第十九

雀の宿

群

昨日から降積つた雪に朝日がさして、どこを
 見てもきら／＼と銀色に光つて、ほんたうに
 きれいです。空を見てゐると、小さな鳥が幾群
 も幾群も、悲しきうな聲で鳴きながら飛んで
 行きます。あれは雪の爲に食物が見附からな
 いので、遠くへさがしに行くのでせう。あゝ、早
 くうちの雀の宿に來ればよいのと思ひな
 がら、裏庭へ行つて見ると、もう數へきれない

程雀が集つて、ちゆうく、鳴きながら、うれし
さうに朝御飯を食べてゐます。

うちの雀の宿といふのは、大きなへうたんの
横に穴をあけ
たのや、古いつ
りどうろうな
どで、それが日
當りのよいの
き先につるし



てあるのです。毎日其の中へ御飯の残りやお
米などを入れて置くと、雀がたくさん寄つて
来て、喜んでそれを食べます。中にはへうたん
の中に泊つて行くのも有ります。いつの昔か
らかうしてあるのか、うちのおぢいさんの子
供の時から、もうこれがあつたといふことで
す。一度こゝへ来た雀は次から次と友だちを
連れて来るのか、時には何百羽ともわからな
い程集つて居ることがあります。こんな雪の

朝などはいつもよりたくさん集るので、いくら餌えをやつても、すぐに無くなつてしまひます。

今朝やつた餌ももう無くなつたものと見えて、集つてゐる雀は皆さびしさうにしてゐますが、なほ後からくゝ寒さうな様子をして飛んで來ます。

私はなるたけ此のかはいらしいお客様を驚かさないうやうに氣をつけて、お米を入れてや

りました。一度はぱつと飛立ちました。が、よくなれてゐるので、すぐに寄つて來ました。さうして思ひくゝに、こつちのへうたんにはいたり、あつちのとうろくに飛びうつたりして、お米を食べてゐます。中には、向ふの木のに並んでとまつて居るのもあります。おなかが一ぱいになつたので、仲よく日なたぼっこをして居るのでせう。

第二十 ワザクラベ

共

昔、百濟川成トイフ繪カキト、飛驒エトイフ大
 エトアリ、其ノ名共ニ世ニ聞エタリ。工、或日川
 成ニ向ヒテ、

「此ノ頃小サキ堂ヲ建テタリ。四方ノカベニ
 繪ヲカキテタマハリタシ。」

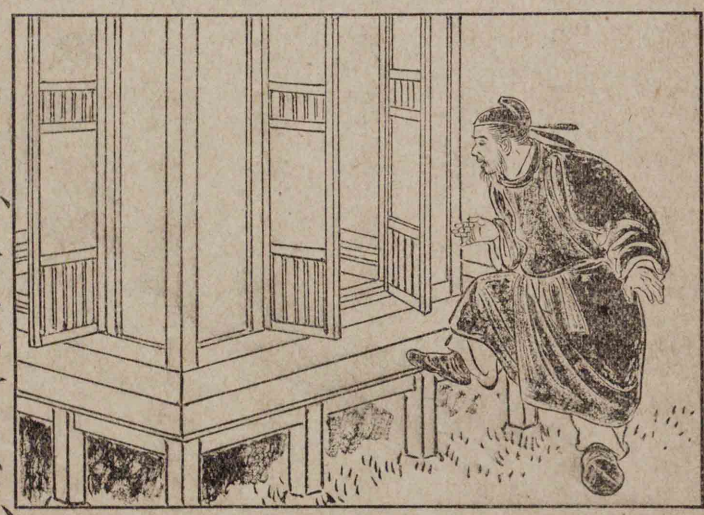
ト言ヘリ。

川成行キテ見ルニ、小サキ四角四面ノ堂アリ
 テ、四方ノ戸皆開キキタリ。工

「入りテ見給へ。」

開

閉



戸開キ、東へ廻レバ、東ノ戸閉ヂテ、北ノ戸開ク。
 幾度カ廻リタレドモ、入ルコトヲ得ズ。工カタ

ハラニアリテ、大イニ笑フ。川成口惜シク思へドモセン方ナクテ、其ノマ、家ニ歸レリ。數日ノ後、川成ヨリ

「我が家ニ來給へ。見セ申シタキ物アリ。」

ト言來レリ。工、先ノ日ノ仕返シスルナラント思ヒナガラ行キタルニ、川成人ヲシテ、

「イザ、入り給へ。」

ト言ハシム。工入ラントスレバ、内ニハ黒ブクレニナリテクサリタル死人横タハリテ、臭氣

臭

鼻ヲツク。工驚キ、アツト聲立テテ逃出セバ、川成戸ヲ開キ、顔ヲ出シテ、

「我コ、ニアリ。何故ニ入り給へ。」

ト言ヒテ、大イニ笑フ。工恐

ク見レバ、コハイカニ、死

ニエガケル繪ナリ

第二

杉本

院 熱

で、
それに、
曜から學校で
どうしたのかと思
朝君の弟さんに聞い
出て、町の病院にはいつた
で、ほんたうに驚きました。
學校で組の人たちに話したら、皆心

贈 歳

配してゐます。君はふだん丈夫だから、すぐなほるでせうが、寒い時節だから、よく氣を付けて下さい。今度の日曜には御見まひに行く積りです。

一月十日

鈴木義一

杉本 久君

第二十二 水引トノシ

歳ノ暮ニ方々カラ贈物が來タ。ドレヲ見テモ、
ノシヲ附ケタリ、水引ヲカケタリシテアル。オ

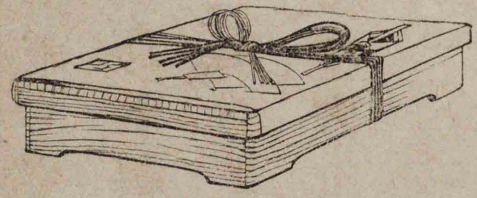
マツハ母ニ

此ノノシハ何ノ爲ニ附ケルノデセウ。

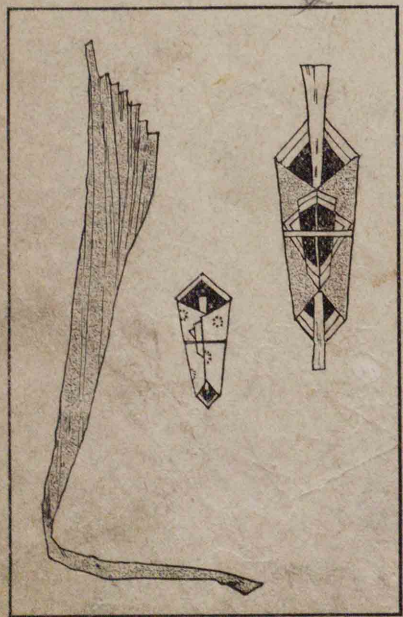
ト尋ネタ。母ハ

ソレハ人ニ物ヲ上ゲル時ノ昔カラノシキ
タリデス。昔ハ贈物ニハ多クナ
マグサ物ヲソヘタモノデスガ、
後ニハ其ノナマグサ物ノ印ニ、
ノシアハビヲ用ヒタノデセウ。
ソレガ又變ツテ、今ノヤウナノ

變 印



シニナツタノデス。ソレデスカラ、今デモ魚
ヤ鳥ヲ贈ル時ニハノシヲ附ケマセン。又人
ノ死ンダ時ナドノ贈物ニハ、ナマグサ物ヲ
用ヒナイコトガ多イカラ、ノシモ附ケマセ
ン。
ト教ヘタ。オマツハ又
ハシアハビトイフ
ノハ何デスカ。
ト聞イタ。母ハ



ソレハアハビノ肉ヲ薄クノシタモノデス。ソレヲ紙ニ包ンデ贈物ニソヘタ形ガ、今ノノシニモ残ツテキマス。御覽ナサイ、此ノ真中ニアル黄色ナ薄イモノガノシアハビデス。

「水引ハ。」

昔ハ贈物ヲユハヘルノニ、糸ヤ、コヨリヤ、元結ナド、イロクナ物ヲ使ツテキタノデスガ、其ノ後水引ガ出来テ、贈物ニハ必ズ之ヲ

カケルヤウニナツタノデセウ。水引モ、フダンノ贈物ニハ紅白ヤ金銀ナドノモノヲ使ヒマ스가、不吉ノ時ニハ黒水引ヤ白水引ヲ使ヒマス。

第二十三 雪合戦

(一)

晴れたる朝の雪の原、東と西に立別れ、

「用意」始めの聲の下、

手にくく飛ばす雪つぶて。

(二)

當りてひるむひけふ者、

恐れず進むがりの者、

雪をけ散らし雪を浴び、

互に寄する敵味方。

(三)

げきせん今と見る中に、

後にひびく休戦の

休 互 浴

ラツパと共に、西東

一度にどつとときの聲。

第二十四 寒い國々の人

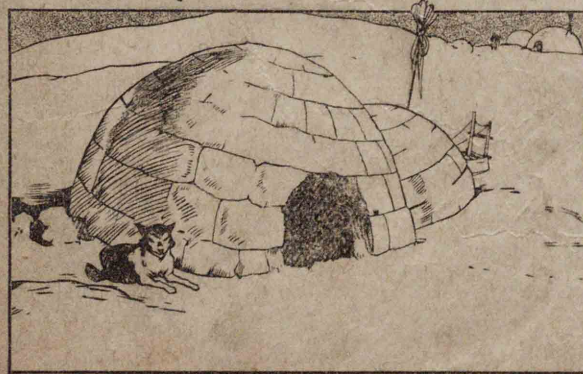
世界のごく寒い國々の人は、我々とは餘程違
つた珍しい生活をしてゐる。さういふ人々の
食物は、おもに獸や魚の肉で、穀物や野菜など
はほとんど用ひない。着物は毛皮で造る。帽子
も靴も大ていは獸や魚の皮で造るのである。
頭のでつぺんから足のさきまで毛皮づくめ

靴 帽 菜穀 餘

の人が雪の中にあるのを見ると、まるで獸かと思はれる。



家は所によつて造方が一様でない。獸の皮のテントを張つて家にする所もあれば、また地面に穴を掘つて、其の上にテントを屋根にする所もある。中には夏はテントを張り、冬は氷の家

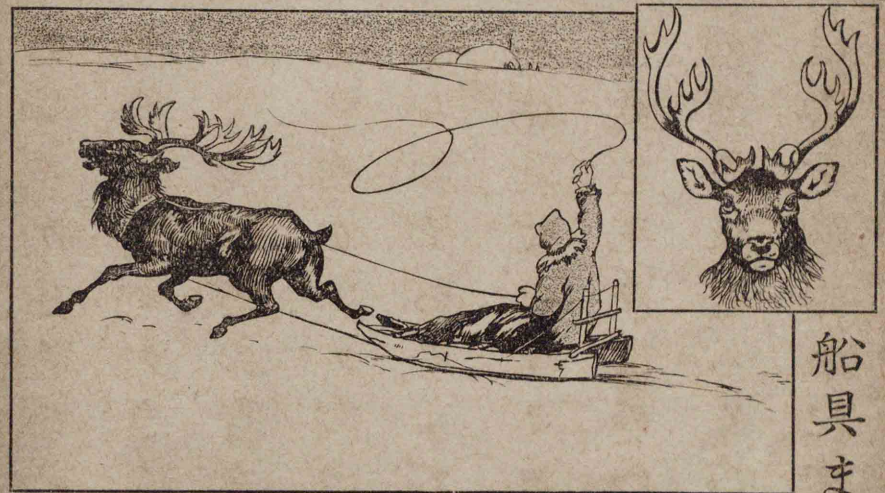


伏窓 燈 射釣

を造る所もある。氷の家は氷を角石の様に切り、之を積重ねて、茶わんを伏せた様な形に造る。總べて寒い國の家は、寒さを防ぐ爲に、窓を小さくし、入口もせまくしてある。

燈は言ふまでもなく、食物をにたり焼いたりするにも、獸や魚の油をもやす。食器も大ていは獸や魚の骨でこしらへる。

獸を射たり、魚を釣つたりするのが毎日の仕事で、それに使ふ弓矢や釣ざを釣針から、船や



船具までも、獸や魚の皮骨などで造るのである。

人が乗つたり、荷物を運んだりするのには、車や馬車の代りに、そりといふものを用ひる。そりは犬やとかいといふ獸に引かせる。となかいは鹿の類で、鹿よりも大きい。足の裏にもこ

都振

滋養

牛乳

縫

はい毛が生えてゐて、雪や氷の上を走るのに都合がよい。大きな角を振立て、そりを引いて廣い雪の野を走る様は、見事なものである。となかいは肉は寒い國の人にとつては何よりの御ちそりで、滋養分もすこぶる多い。乳も牛乳よりすぐれてゐて、老人や子供も喜んで飲む。毛皮は着物になり、角や骨はいろいろの道具になる。くびの所に生えてゐる長い毛は物を縫ふ糸に使ひ、ふんは乾かしてたき物

にする。寒い國の人とは、なにかいが無ければ、生きてゐられないくらゐである。

第二十五 鎌倉権五郎

武

八幡太郎義家の家來に、鎌倉権五郎景正といふ若武者ありき。或時の戦に、敵のはなちたる矢、景正の右の目を射通したれば、景正大いにいかり、其のまゝ突進みて、相手を射殺したり。さて陣屋に歸りて、かぶとをぬぎ、景正手負ひたり。とて、目に矢の突立ちたるまゝ、あふ向け

にふしたり。三浦平太郎爲次之を見て、急ぎ走り寄り、景正の顔をふまへて、其の矢をぬき取らんとす。景正ふしたるまゝにて刀をぬき、下より爲次を突かんとすれば、爲次大いに驚き、「こは何事ぞ」と言ふ。景正聲を荒らげて、



虎 猫

「矢にあたりて死するは武士の常なり。いか
 で生きながら顔をふましめんや。」
 と言へば、爲次げにもと思ひて、無禮をわび、此
 の度はひぎにて顔をおさへて、矢をぬき取れ
 り。これ景正が十六歳の時のことなりとぞ。

第二十六 虎ト猫

「猫デナイシヨウコニ竹ヲカイテオキ。トイフ
 コトアリ。虎ト猫トハ最モヨク似タル獸ナリ。
 虎モ猫モアゴ短ク、首太シ。アゴ短ケレバ、物ヲ

獸

曲



カム力強ク、首太ケレバ、他ノ獸類ヲ捕ヘタル
 時、之ヲ運び去ルニ便ナリ。

足モマタ太クシテ、力強シ。
 虎ハ前足ノ一撃ニテタヤ
 スク鹿ナドヲタフスコト、
 猫ノネズミヲ捕フル
 ガ如シ。足ノ先ニハ鋭
 クシテ曲レル爪アリ、
 用ナキ時之ヲカクス

適 牙

コト、虎モ猫モ同ジ。
猫ノ口ニハ上下ニ二本ツツノ鋭キ牙アリテ、
肉ヲクヒサクニ適ス。又其ノ舌ニハ内方ニ向
ヒテ生エタル太キ毛ノ如キトゲアリ、骨ニ附
キタル肉ヲクヒ取ルニ便ナリ。虎モマタ同ジ。
虎モ猫モヨク木ニヨヂ上ルコトヲ得。又足ノ
裏ヤハラカナレバ、歩ム時音ヲ立テズシテ、靜
カニ他ノ動物ニ近寄り、急ニ飛附キテ之ヲ捕
フ。

靜

熱

此ノ外、目・鼻・耳ノ形ヨリ、尾ノ長ク、ヒゲノ太キ
マデ、相似タル所甚ダ多シ。唯虎ノヒトミハ常
ニ圓ケレドモ、猫ノヒトミハ日中ニハ針ノ如
ク、細クナル。又虎ハ其ノ毛色イツレモ一様ナ
ルニ、猫ハ黒・白・三毛ナド様々アリ。猫ノ中ニモ
虎猫トイヒテ、其ノ毛色虎ニ似タルモノアリ。

第二十七 虎狩とらがり

南の方の熱い國には、日本人がゴムの木を仕
立ててゐる所が方々にある。其のゴム園の一

畜

つに虎が出て来て、度々家畜などをさらつて行くので、人々は皆困つてゐた。或日の夜明方に、ぶたや犬がしきりに鳴きさわぐので、みんなが起きて見ると、大きな虎がぶたをくはへて、すぐそばの林へ逃げこむところであつた。此のままにして置いては危険で仕方が無いから、ゴム園の人々が相談して、すぐ虎狩を始めることにした。虎の逃げこんだ林は大木の茂つた大きな山に續いてゐる。若し虎が其の

危険

相談

木

境

奮

着手

山の中へはいつてしまふと、手の着け様がない。そこで第一に山と林の境を通つて、足跡の有り無しをしらべることになつた。虎がどこにかくれて居るかわからないのに、生茂つた木や草の中を進むのは、きはめて危険な仕事であるが、人々は勇氣を奮つて、とう／＼境目を横ぎつた。虎の足跡が見えないので、まだ確に林の中に居ることがわかつた。一同は勇氣百倍して、いよく攻撃に着手することにな



つた。

虎は身をかくす物の

指揮令

ない所をきらふものだから、林の外へ出る心配はない。そこで全員一列に境目の所に並んで、手にくく武器をかまへ、指揮官の命令にしたがつて、一歩々々虎のある方へおし寄せて

領

行く。敵の領分が次第々々にせまくなる。やがて向ふの草木がざわくと動いて、太いうなり聲が聞える。一同は息を張りつめて、指揮官のさしづを待つ。

「声をねらへ。」

「打て。」

木だまにひびく銃聲、天地もふるふばかりの虎のさけび。人丈よりも高い草む



胸

らが大波の様に動いて、鏡の如き目が其の間からきらりと光る。虎はすきをねらつて、今にも飛びかゝらうとしてゐるらしい。指揮官の命令で、一同は急いでそばの木に上つた。三草の中にかすかに見える目を目あてに、木の上から指揮官が一發打つた。うまく顔に命中した。虎は一聲高くうなつて、をどり上る。すかさず右の胸にまた一發。續いて人々が一せいにたまを浴びせかける。虎は苦しまぎれに草

傷

の中をくるひ廻る。しばらくして一同は木から下りて、虎に近附いた。虎は顔と胸と後足に重傷を受けて、もう立上る力も無いが、それでも人が近寄つたら飛附かうとしてゐる。指揮官がさらに一發左の胸を打つたので、さすがの大虎も二三度はね上つた後に、大地にどつと倒れた。喜の聲は林の内外にひびき渡つた。

第二十八 革

革 袋

革ノ使ヒミチハズキブン廣イ。フダン我々ノ目ニ附ク物デモ、錢入・煙草入ナドノ袋物、ゲタノハナヲ、靴ナド、革デ造ツタ物ガタクサンアル。

隊

軍隊デハ革ヲ用ヒルコトガ殊ニ多イ。先ヅ軍人ノ身ノ廻リノ物ダケデモ、靴・ハイナウ・帶・革・彈藥ガフ、銃ノ負革、劔ノツリ革ナドガアル。馬具ハクラ・タヅナヲ初トシテ、ホトンド皆革デ出來テキル。

劔

掛

必要

馬ニ砲車ヤシチヨウ車ヲ引カセルヒキヅナニモ、革ヲ用ヒル。又砲ノ口ニモ、フダンハ厚イ革ノオホヒガシテアル。鐵ガ無ケレバ戰爭ガ出來ナイコトハ言フマデモナイガ、革モマタ戰爭ニ無クテナラヌ物ニナツタ。

工場へ行ツテ見ルト、帶ノヤウナ長イ革ガ機械ノ車カラ車へ掛ツテ、クル／＼廻ツテキルノガヨク目ニ附ク。コレガシラベ革トイフノデ、機械ヲ動カスニ必要ナモノデアアル。

球 羊 表 劣豚

又野球ニ使フ道具ヤ、タイコツバミシヤミセ
 ンノヤウナ樂器ヲ造ルニモ、革ガ重ナ材料デ
 アル。
 革ノ中デ用途ノ最モ廣イノハ、牛ヤ、羊ヤ、山羊ヤギ
 ノ革デアアル。靴・カバン・袋物・シラベ革ナドニハ
 牛ノ革ヲ多ク用ヒ、手袋ヤ書物ノ表紙ナドニ
 ハ羊ヤ山羊ノ革ヲ多ク用ヒル。又靴モ上等ナ
 モノニナルト、山羊ノ革デア造ルノモアル。馬ヤ
 豚ノ革ハ牛ノ革ニ比ベルト品ガ劣ルガ、價ガ

達 授

安イカラ、牛ノ革ノ代リニ廣ク使用サレル。
 近頃ハ革ノ用途ガマス／＼廣クナルノデ、我
 ガ國デモ、革ノ製造業ガ段々ニ發達シテ來タ。
 第二十九 おのぶさん
 おのぶさんは私の級の級長で、私とは仲のよ
 いお友達です。學校へ行くのに、きつと私をさ
 そつてくれます。おのぶさんがうちへ寄つて
 くれる時間は、きちんときまつてゐて、學校に
 はいつても授業の始る十分前ぐらゐに着き

ます。

私には朝ねをするくせが有つたのですが、おのぶさんが毎朝寄つてくれるやうになつてから、それがすつかりなほりました。

算術
おのぶさんは何でもよく出来ますが、前には算術だけよく出来なかつたのです。それを残念に思つて、うちでも熱心に勉強したので、近頃では、どんな問題を出されても、きつと出来るやうになりました。私も算術が下手ですか

下手

題

ら、おのぶさんのやうに、此の間から毎日うちで勉強してゐます。

帳
おのぶさんは、本を読む時でも、字を書く時でも、いつもしせいを正しくしてゐます。筆記帳の字なども、一字々々きれいに書いてあります。

おのぶさんの髪は、毎朝自分で結ふのださうです。爪もいつもきれいに切つてゐますし、手や足のよごれてゐるのを見たこともありません。

せん。

おのぶさんは誠にやさしい人で、弟や妹をよ
くかはいがり、友達にも親切です。人の悪口な
どは決して言つたことがありません。私が病
氣で學校を休んだ時などは、大そう心配して、
度々見まつてくれました。

旅

第三十 旅行先より

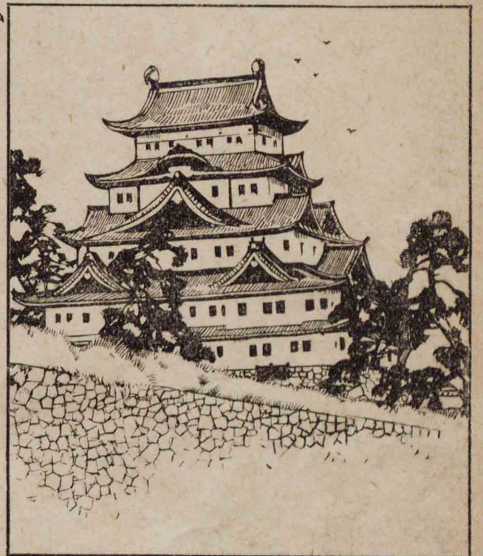
(一) 富士山

父に連れられて、京都のをちの所へ

行きます。朝から珍しいよい天気な
ので、汽車に乗つてゐてもゆくわい
です。今御殿場ごてんばを通り過ぎた所です。
富士山がすぐそばに見えます。山の
いたゞきからすそ野まで雪が真白
で、それが日に照らされてゐる美し
さは、何とも言へません。
(二) 金のしやちほこ
もう名古屋に來ました。話に聞いて

一丈三寸

加



閣かくの屋根の兩はしにあつて、高さが八尺五寸もあるさうですが、遠くからは小さく見えます。此の天主閣は今からおよそ三百年程前に、加藤清

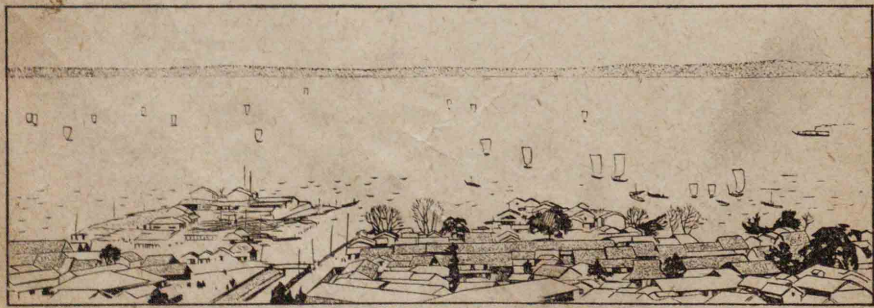
ちほこは天主てんしゆが見えます。しやが窓からよくのしやちほこ

正

正がきづいたのださうです。

(三) 琵琶湖びはこ

琵琶湖が見え始めたのは、彦根ひこねの邊からでした。山や野原の中を走つてゐたのが、廣々した湖水のそばへ出たので、目がさめるやうな心持がし



有

ました。舟が遠くにも近くにも浮いてゐるので、初は海かと思ひました。
おほつ
大津で下りて、有名な三井寺を見て、
今夜京都に着く積りです。

第三十一 橋中佐 (一)

譽役

明治三十七八年ノ戦役ニ、君ノ爲、國ノ爲、名譽ノ戦死ヲトゲシ軍人多カリシ中ニ、海軍ノ廣瀬中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ、軍神トマデアガメラレタリ。

今太

出征

率參

橋中佐ハ今上陛下ノ皇太子ニテアラセラレシ時、東宮武官トシテ、オソバ近ク仕ヘシ人ナリ。三十七年四月出征ノ命ヲ受ケ、第二軍ニ從ヒテ戦地ニ向ヒシガ、八月ノ末、部下ノ大隊ヲ率^{レウヤウ}斗テ、遼陽ノ戦ニ参加セリ。
敵ハ山ニヨリテ陣地ヲ固メ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。我が兵之ヲ物トモセズ、敵陣目ガケテ突撃スルニ、敵ハ劔ノ林ヲ以テ我ヲムカフ。中佐眞先ニ立チテ、敵中ニヲドリ入り、夕チマチ三人

斬 傷 刀 旗

ヲ斬倒ス。
 敵ノ彈丸雨アラレノ如クニ飛
 來ル。中佐スデニ右ノ手ニ傷ヲ
 受ケタレドモ、左ノ手ニ軍刀ヲ
 振ルヒテ、部下ノ兵士ヲ
 ハゲマシク、ツヒニ
 日ノ丸ノ國
 旗ヲ山上ニ
 立ツ。時ハ八月三十一



新 高 滅 退

日、朝日ノイマダ上ラザル頃ナリキ。
 敵ハ之ヲ見テ、三方ヨリ盛ニ大砲ヲ打チカク。
 イカニ心ハ堅クトモ、身ハ鐵石ニアラザレバ、
 砲丸ニ倒ル、兵士數知レズ。敵ハスカサズ、サ
 ラニ新手ヲ加ヘテ攻來ル。中佐ハ大音ニ、
 「一度國旗ヲ立テタル此ノ高地、全滅ストモ
 敵ノ手ニ渡スナ。一步モ退クナ」
 トサケビテ、敵ヲ撃退スルコト數度ニ及ブ。此
 ノ時、中佐第二彈ヲ右ノ手ニ、第三彈ヲ腹ニ受

奮 破

ケキタレドモ、少シモヒルメル色ナク、ナホ奮
戦ヲ續ケタリ。タチマチ砲彈ノ一破片中佐ノ
コシニアタリ、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタ
リ。

第三十二 橋中佐 (二)

曹

カタハラニアリシ内田軍曹ハ、急ギ中佐ヲザ
ンガウノ内ニ助ケ入レテカイハウス。戦ハマ
スマス烈シ。中佐ハ目ヲ見張リテ、軍刀ヲツエ
ニ起上ラントス。軍曹ハ中佐ヲセオヒ、彈丸ノ

辨ハ

失

下ヲクヰリテ、ケハシキガケヲカケ下ル。
ホツト一息ツク折カラ、飛來ル一彈、又モ中佐
ノ胸ヲ貫キ、軍曹ノ胸ヲモ打チヌク。二人ハ一
度ニ打倒サレテ氣ヲ失ヘリ。

占

吹ク朝風ニ、中佐モ軍曹モ正氣附キタリ。軍曹
ハカタハラニアリシ負傷兵ト共ニ中佐ヲイ
タハル折カラ、敵ノ突撃ノ聲盛ニ聞ユ。陣地ハ
フタ、ビ敵ニ取返サル、ニアラスヤ。中佐ハ
残念ナリ。多數ノ部下ヲ失ヒテ占領シタル

殿 目 丁 苦

陣地ヲ取返サル、カ。

ト言ヒナガラ、形ヲ正シテ、

今日ハ我が皇太子殿下ノ生マレ給ヒシ日

ナリ。此ノメデタキ日ニ討死スルハ軍人ノ

面目ナリ。

ト言ヒツ、息タエタリ。

コレヨリ先、中佐ハ馬丁ニ命ジテ、

若シ夜明頃、突撃ノ聲聞エテ、砲聲銃聲ナホ

續キナバ、コレ我が軍ノ苦戦ナリ。我必ズ戦

言 幸

烈 特

周 圍

死セシ。

ト言ヒシガ、其ノ言不幸ニモ適中シタリキ。

橋中佐ハ平生志堅ク勇氣ニミチタル軍人ニ

シテ、部下ヲアハレム心モ深カリキ。此ノ平生

ノ行アリテ此ノ壯烈ナル死ヲトグ、中佐が多

數ノ戦死者中、特ニ軍神トアガメラル、モウ

ベナリトイフベシ。

第三十三 地球

我々の住んで居る地球は、周圍が一萬里もあ

球 低

る大きな球で、まはりには空氣に包まれてゐる。表面には高低があつて、低い所には水がたまつてゐる。其の高い所が陸で、水のたまつてゐる所が海である。海の廣さは陸の廣さの二倍半ばかりある。

湖

陸の中に又高い所と低い所があつて、それが形によつて山谷平地などと呼ばれてゐる。水のたまつてゐる所や流れてゐる所もある。たまつてゐるのは湖や沼で、流れてゐるのは川

端 極 反 對

である。海にも深い所があり、浅い所がある。人間や動物や植物が、陸の上、水の中、それぐ、自分に都合のよい所に棲み、都合のよい所に生えて居る。

地球を南北の二つに分けて、南の半分を南半球、北の半分を北半球といふ。又南半球の南の端は南極、北半球の北の端は北極といふのである。北半球と南半球とは季節が全く反對で、北半球の春は南半球の秋、南半球の冬は北半

球の夏である。又兩半球の境目の邊は、大てい
 年中甚だ暑くて、雪も降らず、氷も張らないが、
 兩極に近い所は、いつもひどい寒さで、美しい
 花などはほとんど見ることが出来ない。我が
 日本はごく寒い所とごく暑い所の中間にあ
 るので、氣候が餘り片寄り過ぎず、四季折々の
 ながめが多い。

第三十四 海と陸

洲

地球上の陸地を分ちて、アジヤ洲・ヨーロッパ洲・

再 週 衆

アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲及び
 大洋洲とし、海を分ちて、太平洋・大西洋・印度洋
 とす。我が大日本帝國はアジヤ洲の東部にあ
 り。

地球は圓きが故に、いづこより出發して東へ
 東へと進むとも、西へくと進むとも、再び元
 の所に歸り來るべし。我が國の港を出でて東
 へ向ひて航すれば、およそ二週間にして、太平
 洋を越えて北アメリカ洲の合衆國に着す。こ



こに上陸して、四五日の間汽車に乗續くれば、大西洋の海岸に達す。こゝより再び汽船に乗りて、大西洋を東へ進まば、六七日にして、ヨーロッパの港に入るべし。イギリス・フ



ランス・イタリヤ・ドイツ等の國々は、皆ヨーロッパにあり。ロシヤ國はヨーロッパとアジアとの二大洲にまたがれり。ヨーロッパの西岸に上陸し、汽車に乗りて東へ向はば、フ

満 費

轉路

ランス・ドイツ等を過ぎてロシヤに入り、シベ
 リヤを横切りて、満洲より我が國に歸るを得
 べし。此の間に費すところ十數日に過ぎず。
 ヨーロッパ洲より汽船にて日本へ歸るには、ヨ
 ーロッパ洲とアフリカ洲との間なる地中海を
 過ぎ、印度洋に出で、印度の南を、東へ向ひて進
 むべし。それより航路を東北へ轉じ、支那しなを左
 にして進むときは、出發より六七週間にして
 我が國の港に入るなり。

第三十五 千里の山河

(一)

千里の山河 たちまち行く汽車、

波濤はたう萬重 物ともせぬ船。

機械の力 世界をちがめ、

遠き國々 隣の如し。

(二)

人智の進歩 限りも知られず、

見よ、航空機 自由にかけりて、

智

萬重

腕 庭 新限 夢

昔の人の 夢にも知らぬ
無限の領土 新に得たり。

(三)

海陸總べて 我等の庭園、
空中旅行 心のまにく。
いたる所に 腕を振るひて、
御國の爲に いさをを立てん。

終

大正十年 五月 八 日 翻刻印刷
大正十年 五月 廿八 日 翻刻發行

尋常小學讀本 卷八

大正十年度 金貳拾錢
臨時定價

巳

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者

原 亮 一 郎

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

大正十年五月十六日
文部省檢査濟

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

